

ことを拒まぬが、意志の弱い、感情一邊の人は、見合たがよからうと勸告するを躊躇しない。

畫家にでもならうと、志を立てた人は、多少の天分はあるのであらう。人一倍の勉強をしたなら、天分の乏しいものでも、相應の成功は疑ひない。若し、君にして身體が強健で、意志が堅固で、身に繁累なく、相應の學資が得られるなら畫家になり給へ。若し止を得ずして、最後の條件を缺くとも、第一第二の條件は、必ず具備せねばならぬことを覺悟したまへ。と私は、白也氏に恚う答へたいのである。(一月九日)

旅日記を出版すべく、古い草稿の校訂やら、新に起草する旅行記など、いろいろの調物があるので、一週間箱根に暮すことにした。丁度二日續きの休日で、正男も山登りがしたいといふ。連てゆくことにする。正男一人では歸京の時困るので、妻も同行する。夕方宮の下に着いて、五段に泊つた。(二月十日)

△繪を見るのには、其繪の對角線の二倍以上を離れるのが元則になつてゐる。對角といふのは、一方の上の隅より他方の下の隅迄の斜めな線を指すので、對角線が二尺あれば四尺以上離れて見るべきものである。それ故室内に額を懸ける時は其心得がなくてはいけぬ。

△光線の不十分な場處は適當ではないが、またあまりに窓近く

強い光線の射す處もいけない。高い窓、又は天井から柔らかに落して來る光線が一番よい。普通の日本座敷ではそのやうなお詭向にはゆかぬが、一なるべく光線の入る窓なり縁側なりの正面を避けて、光りを側面から受けるやうにしたらよからう。

△傾斜の度は見人の目に對して。平面になるやうにすればよい。懸ける處が高ければ傾きが強くなる、低ければ殆ど傾なし、壁と平行してよい。椅子につくのと座するのでは幾分傾きに相違が出來やう。

△額は必ずしも鳴居の上に懸けなくともよい。鳴居から糸を垂れて、其下へ懸けてもよく、又大きな縦畫などは、鳴居を跨いで懸けても差支はない。

△繪畫の保存上避けたいものは、直接若くは強い日光の反射、煙草の煙、アンモニアの臭氣、濕氣等が重なるものである。

△額縁の蠅を防ぐ法といふのがある新聞の記事に見た。かうである。

▲蠅を防ぐ法▼

蠅といふ奴は却々意地の悪いもので、綺麗な額縁を瞬く間に汚點だらけにする、殊に金縁の額なんか蠅の糞で見苦しくなるが、金縁を蠅に蹂躪させない様にする最も簡便な方法がある、其れは玉葱を一つ刻んで、之に一合許りの熱湯を注ぎ、蓋をして二日経つて後之を漉し、刷毛に附けて額縁に塗つて置けば蠅は決して近寄らぬとの話である。

* * * * *